教授および小生などである。他の科学分野の研究者に比べて少ない地理学者の中ではこれは決してわずかな割合とはいえないと思う。私はその理由について時々考えることがある。

五中の創立は大正8年（１９１９年）であり，初代校長は有名な伊藤長七先生であった。先生は一中，三中，四中など既成の学校に対して新らしい教育の理想をここで実現すべく渾身の努力を尽された。セビロにネクタイという型破りの制服や，女性の教諭の採用などは当時の世間をおどろかせたが，しかしもっと重大なことはそうした表面的なことでなく，若いわれわれの生きる態度として〝立志・開拓・創作〟の三つのモットーを徹底的にたたきこんだことであった。何かをしようとする目的をしっかりもつこと ――これが〝立志〟であり，そのためにあらゆる困難をのりこえていくこと―― これが〝開拓〟であり，さらにそうしたものの上に他人の借りものでない自分自身のものをつくりあげること ――これが〝創作〟である。この三つの精神はまさに研究者を育てるのに不可欠のエスプリである。いわゆる当時の大臣，大将をめざした他のエリート校に比べ，新設の五中の出身者が大きく学界に活躍するに至った根本原因はここにあったのであろう。卒業生名簿をみても本当に研究者の多いことにおどろかされる。当時の校友会雑誌をみてもこれが中学生の仕事かと思われるようなりっぱなものがたくさんあった。吉村信吉さんなどはその頃から洗足池の研究ととりくんでいた。松井先生もおそらくこういう雰囲気のなかで科学者としての精神をしっかり身につけられたものと私は信じている。そして卒業者の中に地理学者が多いというのも，換言すれば他部内の研究者がさらに一層多いということなのである。三沢勝衛氏の感化で諏訪中学から多くの研究者が生れたことは有名な事実であるが，五中におけるわれわれの経験からも教育というもののもつ力の強さ（同時にある意味ではおそろしさ）を今さらのように感じるのである。伊藤先生は惜しくも早く亡くなられたがその残された教えが長く校風として育ったわけであり，ことに直接その教えにあづかったわれわれの年代のものは一層幸福な思いに浸ることができる。

A.Hettner先生に憶う

岸本　実

この間，お茶の水女子大学へうかがったとき，松井先生が大学院の講義で，A.Hettner先生の著書Die Geographie, ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methodenをつかわれておられることを耳にし，本当に嬉しいことだし，本当に結構なことだと感じた。

この書物が出版されたのが１９２７年だから，それからもう５０年に近い歳月が流れたことになる。かつてわたくしも学生時代にこれを手に入れ，敬仰の念で読んだことがある。

A.Hettner 先生の若かりし日，同先生が大学に学ばれたころには，新カント学派の認識論が一世を風靡し，自然科学と文化科学ないしは歴史科学との区別が峻別され，その影響で，自然と人間を取扱う地理学は科学には値しないとの見方があり，地理学の方法を統一するためにも，人間を地理学の対象から除外する意見さえあり，まさに地理学にとっては混迷の時代であったと聞いている。そんななかでできたのがこの書物かと思う。戦後の日本の地理学界のなかでも，５０年前のそんな空気がなくはない。

松井先生は１９３５年の地理学評論第１１巻第５号で，「地理学に於ける法則性と偶然性」と題し，A.Hettner 先生を紹介され，早くから先生の業績に深い関心をもたれていたし，いま A.Hettner 先生の考え方を伝えていただけることは結構なことである。

戦後，若い研究者達が，どの学問分野を問わず，「原点」に接することを敬遠する傾向にある，新しい地理学を更に進めるためにも，日本・外国を問わず「原点」に立ちかえって三思することが特にのぞまれよう。

松井勇先生のプロフィル

木　内　信　蔵

松井勇教授が昭和４８年３月を以て公的な生活から退かれ，新しい人生を踏出されることは，惜しいと言うよりお喜びしたい気持で一杯である。この半世紀は，日本の社会も学界も大きな嵐の中にあって，その煩さに係り合うことは，学者らしい学者としての松井さんに対してはまことにお気の毒であった。兵隊としての召集訓練から学生騒動との対応まで，それらは松井さんにとって不得意であり，而も避けられないことであったろう。これからは自由に，今までの研究を更に磨きあげて，後進に道を示して頂きたいと思う。

松井さんと知り合ったのは，私が東京帝大理学部地理学科の１年に入学してからで，４０年の昔に溯る。既に大学院２年に在学して，新進の学者としての仕事を次々と発表されていた。ドイツ文献の紹介批評をはじめ，多摩丘陵をフィールドとする土地利用の研究など，理論的な方法を開拓されつつあった。その頃の大学院には，岡山俊雄，吉村信吉，村田貞蔵などの諸氏がおられ，地形学